中世後期ネーデルラントにおける聖地の表象と贖宥

青谷秀紀

【要約】中世後期のキリスト教世界では、信徒たちが、煉獄での滞在期間を可能な限り短くするため、様々な方法で贖宥を獲得しようとした。個人が限定された空間で想像のうちに聖地へと旅立つ仮想巡礼や、都市空間にエルサレムやローマの表象を重ね合わせることで都市を聖地化するプロセッションなどの集団的儀礼はその有力な手段であった。本稿では、内省的な宗教運動が広まりを見せると同時に、高度な都市化を経験した中世後期のネーデルラントを対象に、一見対照的とも思われる双方の実践が、ともに聖地の表象を喚起することで聖なる時間と空間を追体験し、救霊のための祈りを試みるという同質性を有していたことを明らかにしたい。そこからは、中世後期のキリスト教世界に特有な集団と個、公と私の関係性が浮かび上がってくるだろう。

史林　九八巻一号　二〇一五年一月

はじめに

中世後期のヨーロッパでは、信徒たちが、自らの魂の救いを求めて贖宥を渇望するという現象が見られた。贖宥とは、一般に信徒がこれを獲得することにより罪の贖いを免除されるという霊的恩恵を指す。カトリック信仰において、この恩恵は、キリストの受難、聖母や聖人の事績により溜め込まれた「功徳の宝庫 Treasury of Merits」から引き出されるのだと説明される。[1] その「宝庫」に由来するものを金銭の対価として保証する贖宥状へのルターの批判は、あまりにも有名で

あるが、そもそも、中世後期における贖宥熱の淵源は、おおよそ一二世紀末にまで遡ることができる。この時期のキリスト教世界では、天国と地獄に次ぐ第三の場所として煉獄が誕生し、これ以降、信徒たちは現世における自己の罪の重さと、これに対応する煉獄での罪の贖いの日数を推し量るようになる。そして、彼らは煉獄での滞在をいかに短くし、いかに速やかに魂の救いへと至るかに心を砕くようになるのである。このような心性を背景として、贖宥は中世後期の信徒たちから大きな関心を集めることとなる。宗教改革前夜の「贖宥狂い」とでも表現すべき熱狂はここに由来する。

ところで、贖宥を得るためには、さまざまな手段が存在する。教会への寄進や救貧と並んで、聖地巡礼は贖宥獲得のためのひじょうに重要な信心行の一つであった。しかし、必ずしも現地に赴かなくとも聖地巡礼と同じ贖宥を得る手段が存在した。それが仮想巡礼もしくは霊的巡礼と呼ばれるものである。中世後期に流行する仮想巡礼とは、現実に巡礼の旅に出たいにもかかわらず、様々な条件によってそれが困難な信徒が実践したものである。身分的に外出を厳しく制限される修道女たちは、こうした想像上の巡礼を数多く実践した人々の代表的な存在であるが、それに限らず俗人信徒全般もこれを受容していた。その実践においては、後述のように、建築物から絵画に至るまで様々なメディアが駆使されたものの、テクストや図像からなる指南書の助けを借りて行われることも多かった。中世後期、とりわけ一五世紀後半は「旅行記の黄金期」と評されるほどに数多くの聖地についての記録が生み出されたが、[2] 仮想巡礼に用いられるテクストには、しばしばこうした現実の聖地巡礼記の叙述をもとにしたものも存在する。[3] 読者は、それらのテクストで、キリストの生涯にゆかりの地を想起し、その各地に割り当てられた祈りを唱和するよう指示される。これに従うことで、読者は黙想のなか巡礼を果たしえたのである。

こうした仮想巡礼は、広くヨーロッパ全体で見られた現象であるが、これまでの代表的な研究であるK・ルディの著作が示すように、とりわけネーデルラントにおいてその痕跡が数多く確認される。[4] 中世後期のネーデルラントでは、「新しい敬虔 Devotio Moderna」に代表される内省的な宗教運動が流行し、静かな空間で営まれる個人的で神秘主義的な信仰

形態が広く行き渡っていたのである。仮想巡礼の実践は、こうした土壌のうえに花開く。

しかし同時に、この時期のネーデルラントは、同時代のイタリアと並んでヨーロッパで最も都市化が進んだ地域であり、都市空間では市民らによって大々的な宗教的祝祭が実施された。そして、彼らはその場で集団的な陶酔のなか贖宥の恩恵に与ることもあった。しばしば都市政府主導のもと展開され、現代の歴史学では「市民的信仰 civic religion」という言葉で表現されることもあるこうした信仰のあり方は⑤、一見したところ、私室で個人が行う黙想的実践と対極的な様相を帯びている。

本稿の課題は、以上のような、中世後期のネーデルラントで確認される両極端に見える二つの信仰のあり方が、じつのところどのような関係にあったのかを明らかにすることである。仮想巡礼は、近年ようやく研究者の注目を集めるようになった現象であり、それが同じ地域、同じ時代の公的で集団的な信仰形態に対していかように位置づけられるのかはまだ十分に解明されていないように思われる。本稿は、私的な信仰形態と公的なそれにおける聖地の表象と贖宥、そしてこれらを引き出すための祈りの関係に焦点を当てることで、そうした研究上の欠落をわずかなりとも埋めようとする試みである。以下、第一章では、仮想巡礼と、都市の公的信仰の背景について概観的な説明を加える。第二章は、そうした説明を前提としたうえで、具体的に聖地エルサレムの表象と贖宥を取り上げ、それらを通じて私的な信仰と公的なそれの関係を追う。第三章では、同様な試みが、聖地ローマの表象と贖宥を通じて展開されるであろう。

① W. Gibson, "Prayers and Promises: The Interactive Indulgence Print in the Later Middle Ages", in: *Push Me, Pull You. Imaginative, Emotional, Physical, and Spatial Interaction in Late Medieval and Renaissance Art*, vol. 1, eds. S. Blick and L. D. Gelfand, Leiden, 2011［以下では、*Push Me, Pull You* と省略する］, pp. 277-324, とくに pp. 283-284.

② 櫻井康人「一四五〇年～一四八〇年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観――後期十字軍再考（四）――」、『ヨーロッパ文化史研究』一二（二〇一一年）、一七九-二二七頁。

③ 代表的な著者である一五世紀後半のドミニコ会士フェリックス・ファブリについては、次の文献を参照。K. Beebe, *Pilgrim and Preacher. The Audiences and Observant Spirituality of Friar Felix*

Fabri (1437/8-1502), Oxford, 2014, とくに p. 206.

④ K. M. Rudy, *Virtual Pilgrimages in the Convent. Imagining Jerusalem in the Late Middle Ages*, Turnhout, 2011 [以下では、*Virtual Pilgrimages* と省略する].

⑤「市民的信仰」の定義については、A. Vauchez, "Introduction" in: *La religion civique à l'époque médiévale et moderne (chrétienté et islam)*, ed. A. Vauchez, Rome, 1995, pp. 1–5.

I. 聖地の表象と儀礼、メディア

(一) 仮想巡礼と都市儀礼

先述のように、仮想巡礼は比較的最近になって注目を集めるようになったテーマだが、とりわけ美術史家や文学史研究者がこれを取り上げることが多いように思われる。その点からも明らかなように、この想像上の巡礼は、神秘主義者の著作やキリストの受難を描く中世絵画との関連で論じられることが多い。[①] 最も重要な成果としては、K・ルディの著作が挙げられる。彼女の研究は、中世後期のネーデルラントにおいて、外出の可能性を限定された敬虔な女性たちが、ヴァーチャルな巡礼を行う際に手掛かりとした指南書のテクストや図像を丹念に分析し、その多様な実践の形態を浮かび上がらせている。巻末には代表的な作品のテクストを収録しており、[②] 本稿もこれに多くを負っている。ただし、「仮想巡礼 virtual pilgrimage」には、これに対応するものとして「霊的巡礼 spiritual pilgrimage」や「想像の巡礼 imagined pilgrimage」といった表現も存在する。[③] イタリア美術を主たる対象としながらも、北方世界に目配りを利かせた水野千依の研究では、「心の巡礼」の表現が用いられている。[④] また、ルディが採用している「仮想巡礼」との表現には、L・ゲルファンドによって異論も提示されている。ゲルファンドの異論は、現実の巡礼と仮想巡礼の関係を整理するにあたっても参考になるため、ここで若干の紹介を試みておこう。彼女によれば、一般に、巡礼は二つのタイプに分類できる。もっとも馴染み深い

第一のものが、現実に行われる身体的行為を伴った聖地巡礼である。第二のものは、旅を行うことなく実践される、想像や身振りなどを伴った様々な信心行を指す。しばしば仮想巡礼の語が適用されているのも、これである。しかし、仮想巡礼の語は、あまりに大雑把でアナクロニスティックであるため、さらに二つの区分を設けた方がよい。一つは「パフォーマティヴな巡礼」であり、旅を行うわけではないものの、特定の目的地に向けて身体的な巡礼を行うものである。もう一つが「想像上の巡礼 imaginative pilgrimage」であり、信徒を想像上の聖地ツアーへと導く、読書のような黙想的活動を伴うものである。そして、現実には、これらのタイプの巡礼はしばしば組み合わせて行われるという。[5]

ルディとゲルファンドの見解をより図式的に把握するならば、以下のようになろう。まず、ルディの研究においては、仮想巡礼の指南書を一人静かに読む行為であれ、次節で紹介する擬似聖墳墓を訪れて祈る身体的行為であれ、信徒が自ら立ち上げることになる、聖地をめぐる想像力の働きが重視されている。彼らには、指南書をはじめとする各種メディアを駆使することで聖地の表象を喚起し、自らの想像世界のなかで聖地を現出させることが可能だったのである。こうした見解は、絵画や建築物に至るまで様々なメディアを考慮に入れつつも、ルディの分析の中心に、仮想巡礼を実践するにあたって最大限の想像力を要求するテクストが位置していたことに由来する。それに対して、ゲルファンドの見解では、身体的行為を伴うかどうかが重視されている。「パフォーマティヴな巡礼」の定義は必ずしも明確ではないが、そこに身体性の重視という姿勢が表れていることは間違いない。これは、ゲルファンドの分類が、建築空間における儀礼の身体的実践を考慮に入れつつ、聖地の表象の働きについて問う過程で導き出されたからに違いない。

ただし、こうした両者における力点の相違は見られるものの、ゲルファンドの見解に確認される身体性への眼差しは、そもそもルディの研究自体にも内包されている。エルサレムへの仮想巡礼では、まず多くの場合、静かな空間で跪き、想像上の巡礼へと移行する。そして、苦難のうちにゴルゴタの丘へと歩むキリストに想像上の世界で付き従うのである。この想像上の歩みのうちに、人類の罪を贖ったキリストの苦しみをどれほど現実的なものとして想像しわが身に引き受ける

か、あるいはどれほどわが子キリストを思う聖母の苦しみに共感できるかが鍵となる。もちろん、仮想巡礼の場合、歩く行為は、その場で、もしくは周囲のごく限られたスペースを利用する形で行われる、ほぼ想像上の行為に過ぎない。しかし、それゆえにこそ、どれだけ具体的に自らの歩行を想像上の空間と同化させるかがポイントとなるのであり、その点での工夫が凝らされてもいた。これが明らかとなるのは、仮想巡礼にしばしば確認される数値へのこだわりである。一五世紀後半に成立したとされ、一六世紀初頭に刊行された「ベトレム殿 Heer Bethlem」の霊的巡礼ガイドには、「われらの愛する主が使徒たち全てとともに最後の晩餐を開いたその家から、オリーヴ山までは、三五〇〇エル（一エル＝約五八センチ）である。ここで、敬虔に〈主の祈り〉と〈アヴェ・マリアの祈り〉を一度ずつ唱えよ。ここでは、七年と七カレーン（一カレーン＝四〇日）の贖宥が得られるのである」[6]といった記述が見られる。これに代表されるように、仮想巡礼の指南書には、特定の場所から次の場所までキリストの歩んだ距離が執拗なまでに書き込まれている場合がしばしば見られる。ルディによれば、キリストが歩んだ距離そのものが聖遺物のような効力を有しているのであり、巡礼を行う者は、正しくその距離を歩むことでキリストを真似ることができるであろう。この数字へのこだわりは、キリストの墓の大きさや傷の大きさなど、キリストゆかりのものをすべてそのまま自ら体験したいという願望に由来している。仮想巡礼を行う者の場合、記された距離を正確にキリストと同じだけの時間をかけて踏破しようとする[7]。仮想巡礼には身近な建築物を利用するパターンも存在したが、その場合、建物の中を、正確に距離を計算しながら歩いたのである。ここでは、現実の身体の動きと想像力のうえでの身体の動きが交錯している。ヴァーチャルな場合であれ、現実の場合であれ、信心行為における身体性は見逃すことができない問題なのである。

以上のような点から、筆者としては、本格的な分析を行う余裕はないにせよ、歩くという身体的行為の重要性を意識しつつ、聖地をめぐる想像力の展開について考察を展開してゆきたい。仮想巡礼を考える上でも、都市儀礼を考える上でも、これによって重要な示唆が与えられるだろう。とはいえ、ルディ及びゲルファンドの両者とも、念頭に置いているのは、

もっぱら個人で実践される私的な信心行の類であって、都市空間で霊的恩恵を求めて集団的に実践される信心行為ではない。上記の研究の視野からプロセッションに代表される都市儀礼が外れているのは、何も偶然ではない。なぜならば、これまでそうした儀礼は、多くの場合、社会史家たちによって、都市の社会構造との関係で論じられることが多かったからである。一四世紀に始まる聖体プロセッションをはじめ、中世後期の都市世界では、都市政府と教会の主催のもと市民たちが大々的な宗教儀礼を展開した。プロセッションの場合、そこに都市社会を構成する諸団体が集団ごとに参加することによって都市の社会秩序が可視化されることになる。そうした都市の「社会体 social body」を表現する儀礼を通じて都市統合が実現され、あるいはその秩序に異議を唱える者たちによって紛争が生じることもある。[8] しかし、いずれにせよ、これまでの社会史研究ではそうした共同体の秩序と都市政府のイニシアティヴのもと行われる儀礼の関係が問われることが多く、プロセッションが表現する宗教的な世界観と都市社会の関係を考察する研究は少なかった。[9] K・リレイによる都市のコスモロジーに関する研究では、中世ヨーロッパにおけるプロセッションと、これによる都市の宇宙論的意味づけについての解釈が施されているが、[10] こうした成果が近年ようやく生まれつつある。ネーデルラントに限定すれば、学際的アプローチのもとブルッヘの聖血行列を論じたTh・M・ボガールトの研究が重要であろう。[11] 筆者もこれらの研究に触発される形で、ネーデルラント都市で展開されるプロセッションのコスモロジカルな側面について検討を加えたことがある。[12] その成果は、以下の議論でも紹介することになるだろう。しかし、この点については、今後解明されるべき部分がまだ数多く残されており、本稿が試みる、私的信仰との関係もそうした課題に含まれる。

次章以下では、こうした研究史の展開を踏まえた上で、仮想巡礼と都市儀礼の関係を明らかにするよう試みるが、具体的な分析に入る前に、さらにもう一点、研究史とは別に、両者の関係を理解するにあたって必要なメディアの問題について、具体的なコンテクストを提供しておきたい。

（二）聖地を表象するメディア

H・リュティクハイゼンによれば、中世後期ホラントの信徒たちが、聖地と自らの住まう地を近づけ、想像上での巡礼を実践しようと試みる際に用いた手段として、以下のものがあげられる。建築物、装飾が施された祈禱用の木製オブジェ、香り玉、巡礼バッジ、祭壇画・彫刻、旅行ガイド、宗教文学、彩色写本、プロセッション、宗教劇である。[13] 信徒たちは、祈りを捧げる際、これらの事物を様々に駆使して聖地の表象を喚起し、聖なる時間と空間への旅を実現しようとした。この指摘は、そのままネーデルラント全体に敷衍しうるものであり、次章以降の分析を理解するにあたって重要な前提となるものである。しかし、リュティクハイゼンの分析はもっぱら中世後期ホラントの絵画とエルサレムの表象について触れるのみであり、中世後期ネーデルラントの信徒たちがどのような形で聖地の表象を喚起しえたのかについて、より踏み込んだ形で議論の足場を構築しておく必要がある。

その点で、中世ヨーロッパにおいて聖地に準える形で都市を建設する事例が散見するのは興味深い。千葉敏之の巧みな表現を拝借すれば、これは都市を聖地に「見立てる」行為であった。エルサレムをモデルに都市を建設すること、ローマの都市プランを模範として諸教会を配置してゆくことなどの手段を通じて、人々は聖地と自らの都市を重ね合わせたのである。[14] ネーデルラントについては、南部の多くの領域を管轄する司教座都市カンブレで、聖墳墓修道院の建設（一一世紀）をはじめとして同市をエルサレムに準えるべく改造が施されており、ユトレヒトでもまたローマへの見立てを確認することができる。[15] こうした聖地の表象をそのまま自らの都市に重ね合わせようとする心性は、次章以降で扱う宗教儀礼を理解するにあたっても重要である。

しかし、信徒らは、自らの住まう物理的空間を構築するにあたって聖地の表象をモデルとするだけではなかった。すでに建設された都市の内部に、聖地に存在する建築物や聖地自体を模ったものを配置することで、聖なる空間を現出させる

という手段も存在した。一五世紀のヨーロッパでしばしば建設された「受難の園 Passion Park」とも表現される擬似聖地は、まさにその事例である。ドイツ都市ゲルリッツの郊外にあるものや、[16]北イタリアのピエモンテ地方にあるサクロ・モンテ[17]などがよく知られている。それらの空間の各所には、ジオラマ付きのチャペルや受難にちなんだオブジェなどが配されており、ここを訪れる者はキリストの生涯を目撃できるようになっている。ネーデルラント都市のルーヴェンやアントウェルペンでは、都市や修道院の一角で「十字架の道行き」を再現すべくオブジェが置かれた、「留」が設けられていた。[18]こうしたキリストの受難の記憶を喚起する役割を果たした装置としては、他に擬似聖墳墓が存在しており、ネーデルラントにもいくつかの事例が存在する。なかでも、ブルッヘのエルサレム教会は格好の事例を提供している。この教会は、ブルッヘの市長をも輩出する都市エリート、アドルネス家により一四三〇年代中頃に建てられ始めた。同家のピーテルとヤーコプが一四二〇年代に行った、エルサレム巡礼の後に建設が始まったとされている。本来はアドルネス家の菩提寺として建設が開始されたこの教会だが、一四三九年には教皇エウゲニウス四世が礼拝堂の完成に貢献した訪問者に贖宥を与えるなど、間もなく、単なる一家系を越えてより広い市民層にとっても重要な意味を持つ施設となってゆく。[19]そして、その内部には、キリストの受難を疑似体験するための仕掛けが施されていた。祭壇には十字架が立つゴルゴタの丘を模し、キリストの受難具が彫られた衝立が配され、脇の階段を上ることはこの丘を登ることを意味したのである。さらに、丘の上にはキリストの像を備えた擬似聖墳墓が設営されており、訪問者はキリストの死をめぐる諸場面の目撃者となる。[20]

北ネーデルラントに位置するザウトレーウのシント・レオナルドゥス教会には、さらに意趣を凝らした一五世紀末の擬似聖墳墓が設置されている。そこでは、キリストの身体が棺に納められ、これを見下ろす形で聖母マリアや天使が描かれている。おそらく、一五世紀当時には、他にもマグダラのマリアやアリマタヤのヨセフなどの像も備え付けられていたと考えられている。やはり、このキリストの身体を前に、キリストやマリアたちと対話を交わすかのごとくに祈りを捧げることで贖宥を得ることができたのである。興味深いのは、こうした場面の迫真性を高めるために、復活祭のシーズンには、

復活し昇天したキリストの身体が取り除かれ、マリアたちは空の棺を見ることになる点である。このとき、同所を訪れた者たちは、聖母たちとともにキリストの奇蹟を目の当たりにすることになる。[21]

以上のような、都市そのものを聖地に準える、あるいは都市空間に聖地に関係する建築物を配置するといった試みは、聖地の表象を物理的に固定化された一つの場に落とし込むことで、信徒が赴くべき祈りの空間を形作っている。これとは対照的に、自らが聖地の表象に入り込むことを可能とするメディアも存在した。次にその点を見てみよう。

中世後期のフランドルやブラバントが、初期ネーデルラント絵画の揺籃の地であったことは周知の通りである。それら初期ネーデルラント絵画は主として宗教的なテーマを扱っており、キリストの受難を描いた絵画も数多く描かれた。そうした絵画のなかには、絵画の注文主が受難を目撃しながら祈る姿で描き込まれることもあった。この点で、ブルッヘで活躍したイタリア商人トンマーゾ・ポルティナリの事例は特筆に価する。ポルティナリは、一四七〇年頃、初期ネーデルラント絵画を代表する画家ハンス・メムリンクにキリストの受難を主題とする作品を依頼した（図1）。

仕上がった絵画のなかで、跪き、受難の諸場面を目撃しながら祈るポルティナリの姿が画面の左隅に描き込まれている。彼の妻マリア・バロンチェッリの姿も反対の画面右隅に見える。V・J・ハルによれば、これは、救世主キリストとその母マリアとともに時空を通じて旅をするという霊的経験のために、キリストの受難の諸場面を一つの作品のなかで表現した絵画として先駆的なものであるという。この絵画を目にしたポルティナリ夫妻は、当然ながら作品のなかの自らに自己を重ね合わせることで想像世界における巡礼を果たしたに違いない。ただし、この絵画は、一四七二年以降数年の間、ブルッヘのシント・ヤーコプ教会のポルティナリ家礼拝堂に設置されていた可能性が指摘されている。[22] したがって、この礼拝堂で、また礼拝堂の傍からこれを目にする他の信徒たちもまた、絵画に描き込まれたポルティナリの視線に導かれつつ、受難の様々な場面を順に目撃し、霊的な巡礼を果たしえたのかもしれない。

以上に挙げた諸事例に共通するのは、聖地をめぐる想像力において視覚が有していた重要性である。視覚をめぐっては、

図1　ハンス・メムリンク『受難伝』（1470年頃）

アウグスティヌスの三段階の視像理論が中世ヨーロッパで大きな影響力を誇った。彼によれば、視像には「身体的視像 visio corporalis」、「霊的視像 visio spiritualis」、「知性的視像 visio intellectus」の三つが存在し、これらは身体的なものから知性的なものへと上昇をたどるヒエラルキーをなしている。この中間に位置する「霊的視像」は、夢や想像世界に現れる像に対応している。[23] ただし、アウグスティヌスにおいては、時間と空間の物理的条件に規定される下位の「身体的視像」はもとより、「霊的視像」もまた、神の恩寵によりもたらされるものではあれ、たいていの場合は不確かなものとされている。これに対して、一二世紀パリのサン・ヴィクトル修道院では、神を求め、見いだすプロセスにおける両者の有益性を強調する見解が唱えられた。身体的視覚も想像力も、人間の情動的能力を喚起する像を精神に生み出すのであり、不可視のもの、神とのコミュニケーションの手段を提供するのである。[24] こうしたサン・ヴィクトル学派の視像論が、中世後期の都市化されたネーデルラントの俗人社会に影響し、神と信徒を媒介するメディアとして図像が大いに活用されるに至ったと示唆する見解も存在する。[25] この点は、以下の議論でも念頭に置かれるべきであろう。

このように、中世後期の信徒たちは、建築物や絵画など様々なメデ

イアを通じて聖地への想像力を凍らせ、巡礼に出かけずともその場にいながらにして人類の救済史の目撃者として魂の救いを得ようとした。聖地の表象をめぐる諸現象が示す、これらの柔軟性と多様性を理解しておくことは、仮想巡礼と都市儀礼の間に相同性を認めるための不可欠な条件をなしているように思われる。

① ここでとくに詳しく取り上げるわけではないが、本稿に近い時代を扱った重要な文献のうち、ごく最近のものだけを以下に挙げておく。B. Kühnel, "Virtual Pilgrimages to Real Places: the Holy Landscapes", in: *Imagining Jerusalem in the Medieval West*, eds. L. Donkin and H. Vorholt, Oxford, 2012, pp. 243–264; R. G. Newhauser and A. J. Russel, "Mapping Virtual Pilgrimage in an Early Fifteenth-Century Arma Christi Roll", in: *The Arma Christi in Medieval and Early Modern Material Culture. With a Critical Edition of 'O Vernicle'*, eds. L. H. Cooper and A. Denny-Brown, Farnham and Burlington, 2014, pp. 83–112.

② 若干の作品を除いて、原文テクストとその英訳が収録されている。Rudy, *Virtual Pilgrimages*, pp. 261–448.

③ H. Luttikhuizen, "Still Walking: Spiritual Pilgrimage, Early Dutch Painting, and the Dynamics of Faith", in: *Push Me, Pull You*, vol. 2, pp. 199–225; M. H. Foster-Campbell, "Pilgrimage through the Pages: Pilgrims' Badges in Late Medieval Devotional Manuscripts", in: *Push Me, Pull You*, vol. 2, pp. 227–274, とくに p. 258. なお、ルディの研究書に収録された史料の一つにおいても「霊的巡礼者 geestelic pelgrim」の語が用いられている。Appendix X, in: Rudy, *Virtual Pilgrimages*, pp. 444–445.

④ 水野千依『イメージの地層——ルネサンスの図像文化における奇跡・分身・予言——』、名古屋大学出版会、二〇一一年、三六七－五〇四頁。ルディ自身も、かつての論考では「心の巡礼 mental pilgrimage」と訳しうる語を用いていた。K. M. Rudy, "A Guide to Mental Pilgrimage: Paris, Bibliothèque de L'Arsenal Ms. 212", *Zeitschrift für Kunstgeschichte* 63 (2000), pp. 494–515.

⑤ L. D. Gelfand, "Bruges as Jerusalem, Jerusalem as Bruges: Actual and Imagined Pilgrimage in Fifteenth-Century Manuscript Illuminations and Paintings," *Annales d'Histoire de l'Art et d'Archéologie de l'Université libre de Bruxelles* 29 (2007) [以下では、"*Bruges as Jerusalem, Jerusalem as Bruges*"と省略する], pp. 7–24; Idem, "Illusionism and Interactivity: Medieval Installation Art, Architecture and Devotional Response", in: *Push Me, Pull You*, vol. 1 [以下では、"*Illusionism and Interactivity*"と省略する], pp. 87–116, とくに pp. 88–89; M. Trowbridge, "Jerusalem Transposed: A Fifteenth-Century Panel for the Bruges Market", *Journal of Historians of Netherlandish Art* 1 (2009) (http://www.jhna.org/index.php/home).

⑥ Den Haag, Koninklijke Bibliotheek, Post-Incunable 231 G22 [以下、KB PI 231 G22と省略する], fol.5r; C. J. Gonnet, "Overwegingen op het lijden des Heeren: voor degenen die in den geest de heilige plaatsen willen bezoeken", *Bijdragen voor de Geschiedenis van het Bisdom van Haarlem* 11 (1884), p. 326, "Item ten eersten male van dien huyse daer onse lyeue heere sijn laetste auontmael adt met alle

sijn lyeue apostolen totten berghe van Olyueten toe. Dat sijn xxxv hondert ellen. Leest deuotelijck een Pater noster ende een Aue maria. Hier verdient men vij iaer aflaets ende vij Carenen".

⑦ Rudy, *Virtual Pilgrimages*, pp. 97–107, 196–198.

⑧ 代表的なものとして次の文献を参照。A. Löther, *Prozessionen in spätmittelalterlichen Städten. Politische Partizipation, obrigkeitliche Inszenierung, städtische Einheit*, Köln, 1999, pp. 1–49.

⑨ 青谷秀紀「信仰のかたち――中世フランドル都市の宗教儀礼をめぐって――」、東北学院大学オープン・リサーチ・センター『ヨーロッパ・グローバリゼーションと諸文化圏の変容』報告書Ⅱ、二〇〇九年、七四－九四頁。

⑩ K. D. Lilley, *City and Cosmos. The Medieval World in Urban Form*, London, 2009.

⑪ Th. A. Boogaart II, *An Ethnogeography of Late Medieval Bruges. Evolution of the Corporative Milieu 1280-1349*, Lewiston: Queenston: Lampeter, 2004.

⑫ 青谷秀紀「プロセッションと市民的信仰の世界――南ネーデルラントを中心に――」、『西洋中世研究』二（二〇一〇）［以下では、「プロセッションと市民的信仰の世界」と省略する］、三六－四九頁。

⑬ Luttikhuizen, op. cit., pp. 200–201.

⑭ 千葉敏之「都市を見立てる――聖墳墓建造にみるヨーロッパの都市観――」、千葉敏之・高橋憲一朗共編『中世の都市 史料の魅力』、日本とヨーロッパ』、東京大学出版会、二〇〇九年、一一三－一五二頁。

⑮ 千葉前掲論文、とくに一二二－一三三頁、一四三－一四四頁；F. G. Hirschmann, *Stadsplannung, Bauprojekte und Grossbaustellen im 10. und 11. Jahrhundert. Vergleichende Studien zu den Kathedralstädten westlich des Rheins*, Stuttgart, 1998, pp. 65–80, 128–144, その他、リエージュの事例（pp. 80–113）も参照。

⑯ この「受難の園」自体が、仮想巡礼の対象ともなりえた。K. Rudy, "Fragments of a Mental Journey to a Passion Park", in: *Tributes in Honor of James H. Marrow: Studies in Painting and Manuscript Illumination of the Late Middle Ages and Northern Renaissance*, London, 2006, pp. 405–419.

⑰ Gelfand, "Illusionism and Interactivity", pp. 111–116; 水野前掲書、四七四－五〇二頁。

⑱ H. Thurston, *The Stations of the Cross. An Account of their History and Devotional Purpose*, London, 1914, pp. 46–75.

⑲ N. Geirnaert, "De Adornes en de Jerusalemkapel. Internationale contacten in het laatmiddeleeuwse Brugge", in: *Adornes en Jeruzalem. Internationaal leven in het 15de en 16de eeuwse Brugge*, eds. N. Geirnaert and A. Vandewalle, Brugge［以下では、*Adornes en Jeruzalem* と省略する］, 1983, pp. 11–49.

⑳ Gelfand, "Illusionism and Interactivity", pp. 95–110; J.-P. Esther, "Monumentenbeschrijving en bouwgeschiedenis van de Jerusalemkapel", in: *Adornes en Jeruzalem*, pp. 50–81; 今井澄子「初期フランドル絵画の「実景」：都市ブリュッセルのアイデンティティの形成とその反映をめぐって」、『大阪大谷大学文化財研究』一三（二〇一三年）、八〇－一〇六頁。

㉑ K. M. Rudy, *Virtual Pilgrimages*, pp. 225–228.

㉒ V. J. Hull, "Spiritual Pilgrimage in the Paintings of Hans Memling", in: *Art and Architecture of Late Medieval Pilgrimage in Northern Europe and the British Isles. Texts*, eds. S. Blick and R. Tekippe, Leiden and Boston, 2005, pp. 29–50; 水野前掲書、四三三－四三九頁。

㉓ 聖アウグスティヌス（片柳栄一訳）「「第三の天」と「楽園」につい

て」、『聖アウグスティヌス著作集』第一七巻、教文館、一九九九年、九九－一五六頁。アウグスティヌスの見解に言及した論考は枚挙に暇がないが、やしあたり最近のものとして以下の文献を参照。E. Vance, "Seeing God: Augustine, Sensation, and the Mind's Eye", in: *Rethinking the Medieval Senses. Heritage/ Fascination/ Frames*, eds. S. G. Nichols, A. Kablitz, and A. Calhoun, Baltimore, 2008, pp. 13-29; B. Williamson, "Sensory Experience in Medieval Devotion: Sound and Vision, Invisibility and Silence", *Speculum* 88:1 (2013), pp. 1-43, とくに pp. 12-31; 水野千依『キリストの顔――イメージ人類学序説――』、筑摩選書、二〇一四年、二四六－二四九頁。

㉔ I. van't Spijker, "Image of Thought: Hugh of Saint-Victor and Richard of Saint-Victor on Thinking", in: *Speaking to the Eye. Sight and Insight through Text and Image (1150-1650)*, eds. Th. De Hemptinne, V. Fraeters, and M. E. Góngora, Turnhout, 2013 [以下では、*Speaking to the Eye* と省略する], pp. 17-46.

㉕ V. Fraeters and J. Pieters, "The Mediating Power of Images and Texts: the Dynamics of Sight and Insight in Medieval and Early Modern Literature and Art", in: *Speaking to the Eye*, pp. 1-14, とくに pp. 6-7. 神学者ジャン・ジェルソンの影響を指摘する次の文献も重要である。今井澄子「一五世紀フランドル絵画における祈禱者とヴィジョン――中世末期のキリスト教社会におけるイメージの役割をめぐる一考察――」、『西洋中世研究』一（二〇〇九年）、一二三－一四〇頁。

Ⅱ．受難の聖地エルサレムの表象と贖宥

（一）エルサレムと仮想巡礼

本章では、エルサレムへの仮想巡礼と都市儀礼の関係について考察する。仮想巡礼は、先に触れたように、様々な手段によって行われたが、ここではルディの研究で用いられた巡礼指南書及びそれに類するもののテクストと図像を中心に分析を行うことになる。それらが、個人の自発的意志に従って、自室の限られた空間で実践可能なものであり、想像世界で完結する仮想巡礼の究極的な事例を提供するからである。信徒たちは、時禱書の一部に収録された文言から、独立して印刷された指南書に至るまで、多様な内容及び形態のテクストを参照して、一人静かに想像世界での巡礼を行いえた。しかしながら、仮想巡礼は、信徒が単に空想の世界で自己満足のために実践する戯れではない。この実践は公的な性格を併せ

持っているのであり、その点を考えるにあたり重要なものとして、改めて祈りと贖宥の意義を強調しておく必要があるだろう。

そもそも、M・モースの古典的研究によれば、祈禱は他者が生み出した言葉に自らの感情を充当することで成立するものであり、特定社会の神話や信仰、諸制度によって枠付けされた儀礼行為である。[1] M・ド・セルトーにとっても祈禱は私的・個人的なものであると同時に、集合的なものでもあり、この儀礼は親族や共同体、教会や慣習が創造する意味により充たされているのである。[2] 中世後期から近世初頭にかけてのフランスの時禱書を詳細に分析したV・レインバーグは、これらの言説を受けて、他者の救霊のための祈りやミサでの集団的な祈りなど祈禱行為の諸相を分析している。そして、この儀礼行為により生み出される現世から煉獄、天国にまで広がるネットワークの広がりを示し、祈りの集合的性格を明らかにしているのである。[3]

仮想巡礼のテクストでもまた、こうした祈りの公的性格を確認することができる。一五世紀後半から一六世紀初頭に南ネーデルラントのリエージュ司教区で複数の写本が制作された、『聖なる都市エルサレムの贖宥 Den aflaet der heilige steden van Jherusalem』という作品では、「この巡礼は、急を要する際、あるいは生死を問わず友人のため、罪の赦しを得るべく実践されうる」と記されており、[4] 一六世紀前半にネーデルラント東部で記されたと推定される史料では次のようないっそう詳細な規定が見られる。

「しかし、霊的巡礼者となろうとする者は、毎朝、霊的な施しとして三回〈主の祈り〉を唱えるべし。最初は、すべての罪人のためであり、われらが愛する主が彼らを罪から解き放ち、御自らのところへと戻されるためにである。次に、苦しみと誘惑のうちにある、すべての悩める魂のためまた巡礼者のためにであり、神が彼らを慰め、励ましてくださるようにである。最後に、未だ煉獄にいるすべての魂のためにであり、われらが愛する主が彼らをそこから解き放ってくださるようにである」。[5]

必ずしもこうした事例ばかりでないとはいえ、孤独な環境で実践される仮想巡礼もまた、決して神や聖人と信徒の間だけの閉鎖的で完結した性格のものではなかったことに注意する必要があるだろう。

一方で、贖宥は、これとは異なる意味で公的性格を付与されている。この霊的恩恵は、教皇や枢機卿、司教といった高位聖職者によって特定の信心行に付与されるものであり、教会の制度によりその霊的な効力を確固として保証されたものである。もっとも、厳密には、歴史的根拠が不確かで、おそらくは偽贖宥とでも呼ぶべきものも存在した[6]。また、贖宥を付与する祈禱文が数多く収録され、仮想巡礼のテクストが挿入されることもあった時禱書は、一四世紀以来俗人社会にも広範な広がりを見せるが、一六世紀半ばのトリエント公会議に至るまで、教会による認可や管理の制度は存在せず、オフィシャルな統制とは無縁なものであった[7]。それでも、当時の信徒たちの多くがそれらの真正性を疑うことはなかった[8]。そのため、贖宥はこれを保証する（あるいは保証したと信じられている）教会制度の領域とこれを欲する信徒の心的な領域が交わる部分に位置しているわけであり、それら信徒たちの実践を単なる個人の自己満足として片付けてしまうわけにはいかない[9]。この点は、仮想巡礼の指南書が、現実に巡礼に出かけるのが困難な者や不適切な者に、実際に聖地に出かけた場合と同じ贖宥を得ることができると保証している点からも明らかである。先に紹介した『聖なる都市エルサレムの贖宥』の冒頭部を見てみよう。

「これは聖なる都市エルサレムとゴルゴタの丘の黙宥であり、十字架を運ぶイエスと彼の受難を真摯に思う者が獲得しえよう。それらは、都市エルサレムにおいてのみならず、どこであれ、その居場所で得ることができるのである。もし彼がその心や精神のうちでこれが生じた都市にいるのであれば、彼は望むごとに贖宥を得ることができよう。汝がゴルゴタの丘を訪れたければ、隔離された場所で跪き、汝の心の目を神に据えよ。そして、汝が哀れな罪人であり、十字架の道でキリストに付き従うに値せぬ者であることを告白せよ。ついで、これを神の称賛と栄誉のためになすという決心を固めよ。汝が行くとき、汝の前に十字架の道でわれら

が主を見ているものと想像せよ。[10]」

ここには、心のうちで聖地とそこで生じた受難を眼前に見るかのように思い浮かべるのであれば、実際の巡礼と同じように贖宥が得られるのだと記されている。これは、何も例外的な史料ではない。「ベトレム殿」の巡礼ガイドにも同様な文言を確認することができる。

「これは、われらが愛する主の受難に関する祈りの黙想であり、主がわれらのために苦難を受けられた場所から場所への距離が記され、その図像とそれらに対して唱和されるべき美しき祈りがここには添えられている。これを敬虔に読む者は、その都度、まるでその身体でもってエルサレムのすべての聖なる場所を訪れたかのごとく、完全にすべての贖宥を得ることだろう。エルサレムに長らく住んだ敬虔なる司祭が計測し、これを著したのである。[11]」

このように、仮想巡礼は、魂の救いを求める信徒たちの切実な願望をみたすべく用意された実践であり、祈りと贖宥をめぐる教会制度に裏打ちされたオフィシャルな性格を有するものであった。

ところで、仮想巡礼は、キリストの受難の記憶を想起するという、本来の巡礼に近づこうとする行為である。そうであるならば、テクストのみならず、図像によって、巡礼者が現実に目にするはずの聖地の風景をヴァーチャルに体験させようとする試みが見られてもおかしくはない。事実、時禱書の類に組み込まれている場合は別として、独立した指南書の場合、豊富な図版が盛り込まれていることも多い。そうした指南書を読む巡礼者たちは、頁をめくるごとに図2のような図版を目にし、ありありとキリストの生涯や受難の各場面を思い浮かべるのである。

テクストと図像により喚起される聖地の表象は、信徒たちに、以上のような時間と場所に縛られない救霊上の実践の機

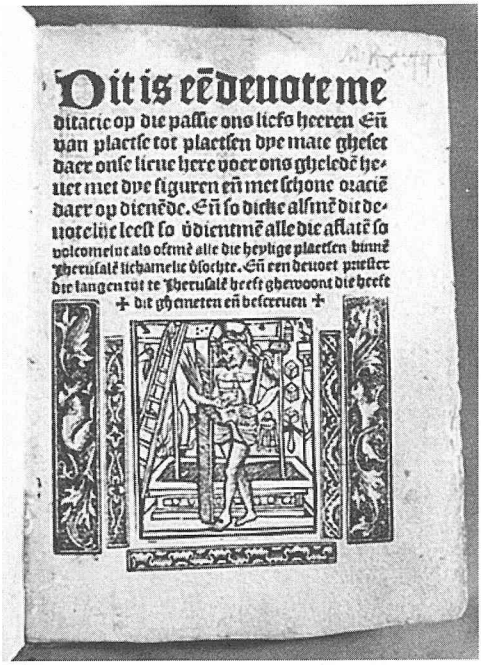

図２　「ベトレム殿」の巡礼ガイド
（テクストは第二章注⑪に対応：オランダ王立図書館所蔵）

会を提供したわけである。ただし、これは必ずしも、この空想上の巡礼が、いつどこでも好きな場面を思い浮かべる形で行いえたことを意味しているわけではない。たとえば、先にも紹介したが、一五一〇年頃からレイデンやアントウエルペン、デルフトといったネーデルラント都市の印刷業者たちが出版した「ベトレム殿」の巡礼ガイドの場合、受難の諸場面が各曜日に割り当てられ、一週間で巡礼が実行されるように構成されている。日曜日には、十字架を担うキリストや最後の晩餐が、月曜日にはゲッセマネの祈りやユダの裏切りが指定される、といった具合である。⑫また、一五世紀末のビルイッタ会修道女のための仮想巡礼コンピレーションの中のひとつでは、やはり月曜から日曜までの一週間で巡礼がプログラム化されている。聖務日課に対応し、朝課から終課までの七つの時課×七日分の場面にキリストの生涯にまつわる様々な諸場面が配されており、修道女たちはその各時間に祈りを唱えていたのである。⑬また、隔離された空間で巡礼が行われるほか、修道女によっては祭壇や回廊などの修道院建築そのものを聖地の各所に対応する場所として利用し、建造物内を巡回しつつ祈りを捧げることもあった。⑭建築物を利用することで仮想巡礼に現実の空間性を与える事例は、隔離された私室で行われる仮想巡礼と、次に検討する都市の公的儀礼との中間に位置しているように思われるが、その点を以下で確かめてみよう。

（二）都市の宗教儀礼と聖地の表象

プロセッションは、一四世紀以降のヨーロッパ都市の儀礼でもっとも重要な位置を占めるものであった。都市政府は、市内の教会と連携し、本来教会内で行われてきたこうした儀礼を都市空間で大々的に行うようになる。市民がギルドなど都市内の様々な社会集団ごとに行列に加わり、都市の聖遺物のもと都市の「社会体」を可視化しつつ都市空間を練り歩くことから、プロセッションは市民のアイデンティティ形成に重要な影響を及ぼす儀礼だったのである。このような儀礼が、聖地の表象や贖宥とどのような関係にあったのか。これが、本節の検討課題となる。ここでは、筆者が以前、簡単ながら考察を加えたトゥルネやブルッヘの事例にも言及するが、その際も、若干のデータを付け加えながら論じるよう試みる。[15]

まず、毎年九月一四日の聖十字架称賛の祝日に行われるトゥルネの聖母プロセッションだが、伝承によれば、これは一〇九二年頃、当時猛威を振るった疫病に対する贖罪行為として始められた。災厄はキリストによる人類の罪の贖い、すなわち受難の記憶を忘れ、神の怒りを買うことで生じるわけであり、再びそのような災厄が起こらぬよう受難の記憶の保持のために行われるのがこのプロセッションであった。[16] 聖地の表象との関連で言えば、合計三回行われるプロセッションのうち詳細が明らかな二回の行進において、別々の手段でトゥルネの街がエルサレムに準えられている点が注目される。演出は時代によって異なると思われるが、少なくとも、一五世紀半ばまでに成立した史料によれば、まず、夜のプロセッションでは演劇的な形での演出がなされ、十字架を担うキリストを演じる者に市民たちは行列をなして付き従うとされている。仮想巡礼を行う者たちは眼前に受難のキリストを見るように思い浮かべよと指示されたわけだが、ここでは、信徒たちはまさにキリストに付き従い受難の舞台である聖地を歩むことになるのである。ついで、日中のプロセッションでは、神を称えるための多くの用意がなされており、行列は都市の四つの場所で立ち止まり、四福音書の言葉が声に出して読まれることになる。これは、福音の教えに対する信仰の表明であると同時に、今後も信仰が維持されるべく「主が十字架上の死

を通じて世界の四つの部分、すなわち全世界を贖われたがゆえに、主が苦難を受けられた十字架の四つの角にちなんで」四つの場所で福音書を朗誦することを意味しているのである。そして、こうして「神の聖なる福音の力を通じて、信徒、市民や住民、そして信仰深き都市そのものが、あらゆる敵の奸計から守られる」ことになるだろう。[17]

ここでは、都市の四つの場所における四福音書の朗読が十字架の四つの角を表現していると明記されており、この儀礼的所作がキリストの受難を都市空間に刻み込む行為であったことがわかる。こうした演出は、円形の全世界の四隅にキリストの頭と手足を配し、なおかつ中心に位置する世界の臍たるエルサレムにもキリストを描いた一三世紀前半の世界地図、エプストルフ・マップを想起させる。同図に確認されるように、中世人の世界観においてはキリストの身体と宇宙全体や聖なる都エルサレム、天上のエルサレムと地上のエルサレム、エルサレムと自らの都市といったさまざまな事象の間に対応関係が想定されていた。[18] トゥルネの宗教儀礼も、都市空間に受難のキリストの身体を重ねることで、宇宙全体や聖地エルサレムとトゥルネの間に象徴的な対応関係を生み出していたのである。そして、こうした形で受難の記憶を喚起するプロセッションでは、参加者たちに六〇年の贖宥が与えられた。[19]

この他にも、同プロセッションでは聖地の表象を喚起する様々なオブジェが用意されていた。まず、豊かに宝石が埋め込まれ十字の形を成す聖十字架の遺物匣が挙げられよう。これは、八世紀もしくは九世紀頃にビザンツで制作されたと思われるもので、第四回十字軍でラテン帝国皇帝の座についたフランドル伯ボードワン九世が都市に寄贈したとされている。聖十字架が東方起源のものであるとするこうした伝承は、聖遺物の真正性を保証し、これを目にする者、あるいはこれに付き従う者たちに、キリストの受難の記憶を強く喚起したに違いない。[20] また、一五世紀にプロセッションで用いられた祭服の留め金もまた、エルサレムとトゥルネの対応関係を表現している（図3）。中世の写本では、聖書に記された天上のエルサレムは円形の都市として表現されることが多いが、この留め金もまた天上のエルサレムと正確に対応する形でトゥルネの街を表象している。[21]

同様な、プロセッションを通じた都市の聖地化がブルッヘの聖血行列でも見られる。一二世紀にエルサレムよりもたらされたとされるキリストの血を中心として、この行列は円形の都市を周回するが、一行はその過程で四つの門にて出入りを繰り返し、都市空間に十字の楔を打ち込んで行く。これによって、行列は、トゥルネの聖母行列とは異なる方法で都市と受難のキリストを重ね合わせてゆくことになる。[22] しかし、それだけではない。ボガールトによると、参加者たちによって決して一義的に解釈されうることはないにせよ、聖血行列は、儀礼の各プロセスにおいて様々な形でキリストの受難や復活を演出している。世界の光たるキリストを象徴すべく光に照らされた早朝の広場では、ミサにおいて液化する聖血がキリストの復活を示す。一五世紀中に成立した史料によれば、キリストの血に導かれながら行進を続ける参加者たちは、市門をはじめとする各所で歩みを止め、キリストの受難を歌う。こうした歩行と停止を繰り返しながら、各自がキリストの歩んだ「悲しみの道 via dorolosa」をなぞることで、ブルッヘの聖地エルサレムへの変容が促される。かつては、聖血で都市を囲い込むことで外部の悪や災厄から都市を守るものと解釈されえたこのルート編成において、キリストの生涯をめぐる意味が強調され始めたのである。[23] 一四世紀末以来、聖血プロセッションの際には「都市エルサレム stede var Jerusalem」と表現される受難劇の舞台も用意されるようになり、都市とエルサレムの同一視はさらに促進されることとなる。[24] そして、やはりこの聖血およびその行列を目にするものには贖宥も与

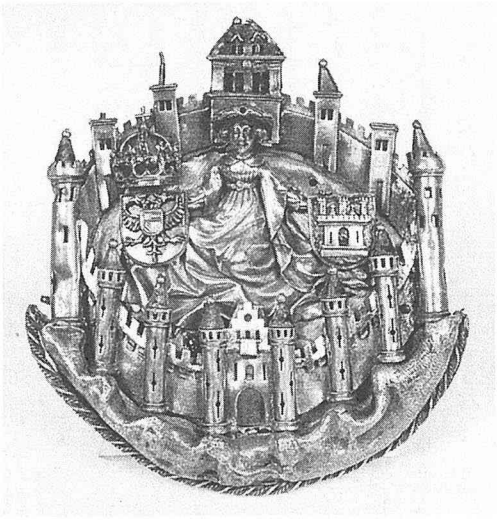

図3　都市トゥルネの表象
（典拠：*La Grande Procession de Tournai (1090-1992)*, p. 36）

えられよう。[25] ゲルファンドによって、聖血行列が、現実と仮想の中間に位置するパフォーマティヴな聖地巡礼として解釈されていることも、ここで強調しておきたい。[26]

もう一つ、興味深い事例を紹介しておこう。リンブルフ地方の都市ハッセルトでは、一三二八年以来、在地の司教によって聖体崇敬に関連して贖宥が与えられていたが、一三五五年にこれが整備される形で四〇日の贖宥が与えられることとなり、以後、「ハッセルトの贖宥」として定着する。同贖宥を求めて各地からは巡礼者たちも多く集るようになるが、司教及び都市の側でも聖体の祝日に大規模なプロセッションを組織するようになる。これに付随して、受難にまつわる説教も行われたという。しかし、とりわけ本稿との関連で重要なのは、プロセッションが「聖地 De Heilige Stede」と名づけられる聖墳墓崇敬に発する聖域を軸としたものだった点である。このハッセルトのプロセッションは、上記のトゥルネやブルッヘとはまた異なる形で聖地の表象と密接に結びついた儀礼だったのである。[27]

もちろん、中世後期ヨーロッパの都市世界で展開されたすべてのプロセッションに等しくこうした聖地化の仕掛けが施されていたわけではない。また、それらに必ずしも贖宥が結びつけられていたわけでもない。しかしながら、少なくとも先に紹介した事例を見る限りでは、仮想巡礼も都市儀礼も同様に、「歩み」とともに聖地エルサレムの表象を喚起し、受難の時空間を追体験しながら救霊のために祈るという、同じメカニズムを有していたことは間違いない。これに関連して、信徒が、仮想巡礼において、ヴァーチャルな聖地を巡るプロセッションに参加することもあった点を付け加えておこう。[28] 私的で個人的な祈りの世界と、公的で集合的な祈りの世界は、一般に予想されるほど明確に区分できるものではなく、連続的に捉えうるものだったのである。これは、プロセッションが本来教会人によって教会内部で実践されていた儀礼である点を考えるならば、さほど意外なことではない。にもかかわらず、聖地をめぐる想像力の働きを考慮に入れず、私室での個人の祈りと都市空間での集団の祈りという外見上の相違に欺かれる形で、先に紹介した聖血行列に関するゲルファンドの指摘などを除いて、これまでの研究の多くはその事実を見逃してきたように思われる。じつは、上記のトゥルネの聖

母行列は、戦時か否かによって教会近辺のみから都市外に至るものまで、様々なルートで開催されていた可能性があるという。㉘ 教会内部から教会周辺、そして教会を大きく超え出た都市空間まで、聖地の表象が伸縮自在の形で教会や都市に貼り合わせられえた点を指摘しておこう。㉙

① M. Mauss, "La prière et les rites oraux", in: *Œuvres* tom. 1, pp. 355-477, とくに pp. 379, 414 (*On Prayer*, trans. S. Leslie, ed. W. S. F. Pickerinng, New York, 2003, pp. 33-34, 57.).

② M. de Certeau, "L'expérience religieuse, 'conaissance vécue', dans l'Église", in: Idem, *Le voyage mystique*, Paris, 1988, p. 40.

③ V. Reinburg, *French Books of Hours. Making an Archive of Prayer, c. 1400-1600*, Cambridge, 2012, とくに p. 140.

④ Appendix IV, in: Rudy, *Virtual Pilgrimages*, p. 373, "Men mach oec desen ganck gaen voer eyn noetsaeck of voor vrinde levende ende doit ende om vergijffenisse uwer sunden".

⑤ Appendix X, in: Rudy, *Virtual Pilgrimages*, p. 445, "Mer so wie een geestelic pelgrim wesen wil, die sel lesen alle morgen drie pater noster voer een gheestelic aelmisse. Dat eerste pater noster voer alle sondige mensche datse onse lieve here uten sonden trecken wil ende tot hem bekeren. Dat ander pater noster sel wesen voer alle bedructe herten die in liden ende in becoringe sijn, ende oec voer die pelgrime datse God vertroeste ende stercken wil. Dat dorde pater noster sel wesen voer alle siele die noch inden vegevier sijn datse onse lieve here daer wt verlossen moet".

⑥ Gibson, op. cit., p. 292.

⑦ Reinburg, *op. cit.*, pp. 13-19.

⑧ Gibson, op. cit., p. 292.

⑨ 贖宥の全般的な歴史については、次の諸文献を参照。N. Paulus, *Geschichte des Ablasses am Ausgang des Mittelalters*, vols. 1-3, Paderborn, 1922-23; *Promissory Notes on the Treasury of Merits. Indulgences in Late Medieval Europe*, ed. R. N. Swanson, Leiden, 2006 ［以下では *Promissory Notes on the Treasury of Merits* と省略する］. この点で、上記の Gibson の文献も簡潔ながらわかりやすい。

⑩ Appendix IV, in: K. M. Rudy, *Virtual Pilgrimages*, pp. 371-372, "Dit is den aflaet der heiliger stat Jherusalem ende des berchs van Calvarien, welck eyn egelick minsche verdienen mach die desen ganck des cruce dragens Jhesu ende sijns bitteren lijdens gedenct mit ynnicheit; niet alleyn inder stat van Jherusalem, mer die mensche machen verdienen waer hi is. Als hi mitter herten ende mitten gedachten ende mitten geist si inder stat daer dit geschiet is, soe mach hi den aflaet verdienen soe dic als hi wil. Als gi den berch van Calvarien visentieren wilt, soe sult gi op ur knijen gaen sitten in eyn heymelike stat ende slaen op die ogen urs herten tot Gode ende bekent u voor hem dat gi eyn arme sundich minsche sijt ende niet werdich en sijt dat gi Christum sult volgen den cruce ganck".

⑪ KB PI 231 G22, fol. 1r; Gonnet, *op. cit.*, p. 324, "Dit is een devote meditacie op die passie ons liefs heeren ende van plaatse tot plaetsen dye mate gheset daer onse lieue here voer ons gheleden hevet met dye figuren ende met schone oracien daer op dienende.

Ende so dicke alsmen dit deuotelijc leest so verdientmen alle die aflaten so volcomelijc als oftmen alle die heylige plaetsen binnen Jherusalem lichamelic versochte. Ende een deuoet priester die langen tijt te Jherusalem heeft ghewoont die heeft dit ghemeten ende bescreuen".

⑫ Rudy, *Virtual Pilgrimages*, pp. 417-420.

⑬ *Ibid.*, pp. 399-410. 一六世紀初頭にリエージュ司教区で作成された写本には、聖週間に読まれるべき仮想巡礼のテクストが含まれている（pp. 411-415）。また、一六世紀中頃の写本では、一日で仮想巡礼を済ませることができるようにプログラムが組まれている（pp. 421-423）。

⑭ *Ibid.*, pp. 209-218.

⑮ 青谷秀紀「顕現する天上都市、遍在する永遠の都――中世後期南ネーデルラントの宗教儀礼と都市の聖地化――」、藤巻和宏編『聖地と聖人の東西――起源はいかに語られるか――』、勉誠出版、二〇一一年［以下、「顕現する天上都市、遍在する永遠の都」と省略する］、八四－一〇六頁、とくに九一－九二頁。

⑯ J. Pycke, "Un témoignage inédit sur le culte de la Croix, de Notre-Dame et des reliques à la cathédrale de Tournai au XVe s.: le «Liber confraternitatis fabricae ecclesiae. Tornacensis»", in: *"Scribere sanctorum gesta": recueil d'études d'hagiographie médiévale offert à Guy Philippart*, eds. É. Renard and M. T. Renard, Turnhout, 2005, p. 695.

⑰ *Ibid.*, p. 694.

⑱ Lilley, *op. cit.*, pp. 158-184.

⑲ *Ibid.*, pp. 690-691.

⑳ R. Tekippe, "Grand Procession at Tournai: The Community Writ Large", in: *Push Me, Pull You*, vol. 2, pp. 523-558, とくに pp. 534-536.

㉑ *La Grande Procession de Tournai (1090-1992). Une réalité religieuse, urbaine, diocésaine, sociale, économique et artistique*, Tournai and Louvain-la-Neuve, 1992; Tekippe, op. cit., pp. 536-538.

㉒ Lilley, *op. cit.*, pp. 165-169; 青谷「顕現する天上都市、遍在する永遠の都」、九〇－九一頁; 同「プロセッションと市民的信仰の世界」、三六－四九頁。

㉓ Boogaart, *op. cit.*, pp. 343-387.

㉔ Trowbridge, op. cit.; W. Hüsken, "Politics and Drama: The City of Bruges as Organizer of Drama Festivals," *The Stage as Mirror: Civic Theatre in Late Medieval Europe*, eds. A. Knight and D. S. Brewer, 1997, pp. 165-187.他に、聖血行列全般を論じたものとして、次の文献を参照。A. Brown, *Civic Ceremony and Religion in Bruges c. 1300-1520*, Cambridge, 2011 pp. 37-72.

㉕ Trowbridge, op. cit. 一三一〇年の教皇勅令では、金曜日に聖血を見たものには一〇〇日の、聖血行列を見たものには五年及び五カレーネン（＝四〇日）の贖宥が与えられている。

㉖ Gelfand, "Bruges as Jerusalem, Jerusalem as Bruges", pp. 9-13.

㉗ W. Frijhoff, "Geloofsleven, politiek en maatschappij. Hypothesen over de middeleeuwse oorsprong van de Heilige Stede van Hasselt (Ov.)", *Volkskundig bulletin* 6.1 (1980), pp. 1-25; Idem, "Ritual acting and city history: Haarlem, Amsterdam and Hasselt", in: *Urban Rituals in Italy and the Netherlands. Historical Contrasts in the Use of Public Space, Architecture and the Urban Environment*, eds. H. de Mar and A. Vos, Assen: Van Gorcum, 1993, p. 93-106.

㉘ Rudy, *Virtual Pilgrimages*, pp. 338, 433, 438.

㉙ Cauchie, op. cit., pp. 46-48. Cf., Tekippe, op. cit., pp. 541-542.

㉚ また、やはりかつて筆者が別稿で紹介した通り、フランドル都市サン・トメールの聖母教会で行われた枝の主日のプロセッションでは、天候によって三つの空間が使い分けられ、それぞれの舞台装置でエルサレムが表象された。青谷「顕現する天上の都、遍在する永遠の都」、八七－八八頁。

Ⅲ. 赦しの都ローマと贖宥

（一）ローマと仮想巡礼

では、次に聖地ローマと贖宥の関係について検討しよう。これまで、もっぱらエルサレムへの仮想巡礼についてのみ触れてきたが、ローマに仮想巡礼を行うための指南書も、もちろん存在した。ローマには初期キリスト教時代の数多くの聖人の遺物が存在し、エルサレムから多くの聖遺物がもたらされてもいた。また、ローマはキリストから天国への鍵を委ねられた使徒ペテロとその後継者たち、つまりローマ教皇の座が存在する場所でもあった。原則的に、あらゆる罪の贖いの免除を意味する全贖宥は教皇のみが与えうるものであり、その教皇が鎮座するローマは西方キリスト教世界における赦しの都だったのである。[①]

こうした点から、聖地ローマは北方の信徒を現実の巡礼のみならず仮想巡礼へと駆り立てる多くの魅力を有していたことが明らかだろう。一五世紀末にブラバントもしくはユトレヒトのビルイッタ会女子修道院で作成された指南書では次のような指示が見られるが、ここにはローマ巡礼の重要なポイントが網羅されている。

「七つの教会を訪れる敬虔なる方法。七つの教会を訪れるため、三つの異なる方法が存在することが記されよう。第一に、ある者がその祈りによって、これらの教会の贖宥を得るためあたかもローマにいる如くにするものである。自らを罪ある者と知る者がそ

れら七つの教会を急いで訪れようとしないなどということがあるだろうか。心の底から神の赦しを望み、求めず、その恩寵を得ようとしない者がいるだろうか。なぜなら、その実践によって、まるでローマの街にいるごとくに贖宥を得ることができるのだから。A・サン・ジョヴァンニ・ラテラノ教会にて。そこには数多くの聖遺物が存在する。聖ペテロと聖パウロの頭、われらが主の最後の晩餐における机、われらが主イエスの紫の衣服……。[2]」

ここでは、キリストの七つの苦しみを象徴するローマの七つの教会をヴァーチャルに訪れる方法が記されており、それら各教会が所有する聖遺物のリストも提示されている。また、次に挙げるリエージュのフランチェスコ会系女子修道院で使用されたと思われる一六世紀初頭の書では、より具体的な数字とともに祈りの回数や贖宥の年数が記されている。

「聖年にローマへ出かけたいというある隠者がいた。彼女はその恩恵を次のように得た。すなわち、神の天使が彼女に現れて言ったのである。彼女が庵にとどまり以下の祈りを唱えるならば、そのたびに三万年の贖宥を得るであろうと。そして、これを二〇〇日間連続で唱えるものは全贖宥を得るのであって、それは三万年に値するそれぞれの旅の総計よりも大きいのである。これが教皇の知るところとなったとき、彼は五回の〈主の祈り〉と〈アヴェ・マリアの祈り〉とともに祈りを唱える者のために、さらに三万年を付け加えたが、これは一回の旅につき六万年の贖宥を意味するのである。そして、二〇〇日連続でこれを唱え恩寵のうちにある者は、あらゆる罪からの贖宥を得ることになろう。[3]」

こうしたローマ巡礼の書は、エルサレム巡礼の書とともに同じ写本に綴じ込まれることもあり、ローマの表象は受難の聖地とともにヴァーチャルな救済空間として機能していたといえよう。なお、上記のローマ巡礼の史料はともに女子修道院という宗教施設で利用されていたことが想定されるが、俗人層もこれらと無縁だったわけではない。その点を明らかに

してくれるのが、マーガレット・オヴ・ヨークの巡礼ガイドである。当時のイングランド王家であったヨーク家のマーガレットは、一四六八年にネーデルラントの支配者であったブルゴーニュ家シャルル突進公と結婚し、ネーデルラントへとやってくる。その彼女が所有していた作品に、ローマの七つの教会を訪れる際の巡礼ガイドが存在するが、そこにはそれぞれ定められた日にそれぞれの教会の聖人に祈ることで、その場にいながらにしてローマ巡礼者と同じ霊的恩恵を受けることができると記されている。それぞれの教会とそれに対応する聖人など、巡礼者の想像力を刺激するための図版も豊富に挿入されている点は特筆に価する。④

以上からは、ローマが、エルサレムと並び、ヴァーチャルな聖地として信徒たちの救霊への渇望を充たしていたことがわかる。しかし、ヴァーチャルな聖地ローマと贖宥、あるいは聖地ローマの表象の転移と贖宥という点を十全に理解するためにも、次に、聖年の全贖宥に言及しなければならない。

（二）聖年と贖宥

聖年がはじめてローマ教皇によって布告されたのは、一三〇〇年のことである。この記念の年、ローマに巡礼を果たし、その主要な教会を巡ることで、信徒らは全贖宥を得ることができるのだと教皇は布告した。同年、ローマはヨーロッパ各地からの巡礼者でごった返すこととなる。⑤当初は百年ごとに布告されるはずだった聖年だが、以後、徐々に五〇年あるいは三三年などそのサイクルを短くしてゆき、一五世紀後半に二五年おきとなる。もちろん、ネーデルラントの信徒たちも、この聖年にはぜひともローマを訪れ、全贖宥を得たいと考えたに違いない。しかし、ヨーロッパ内部のローマであってさえも、様々な理由で巡礼を行うことが困難な者、あるいは巡礼を推奨されない者たちが存在した。そうした信徒たちにとって、仮想巡礼の書は決定的な重みをもっていた。一四〇〇年の聖年に関連して記された『何らかの理由で聖年にローマに赴くことができなかった者が霊的に同じ巡礼をなしうる方法』と題する短いテクストは、当時、もっとも影響力のあっ

た神学者ジャン・ジェルソンに（おそらくは誤って）帰せられているが、そこでも霊的巡礼が議論されている。[6] また、やはり聖年である一四五〇年の翌年に、北ネーデルラントを訪れた枢機卿ニコラウス・クザーヌスも、信仰に生きる女性たちに霊的な聖年の巡礼を勧めている。[7]

ただし、一四世紀末、ヴァーチャルなローマ巡礼と現実のローマ巡礼の間の形態を考えるにあたって重要な変化が聖年に確認される。この時期以降、ローマ以外の西ヨーロッパ各地の主要都市でも全贖宥が得られるようになるのである。つまり、ローマで聖年が祝われた後、何らかの理由でローマまで巡礼を行うことができなかった者たちのために、ローマ教皇が西欧各地の主要都市を指定し、そこに巡礼を果たすことで信徒たちは全贖宥を得ることができたのである。ネーデルラントでは、一四世紀末にヘントやリエージュが、一四五一年にはメヘレンがローマの代わりに聖地となっている。[8] このメヘレンの事例についてはすでに議論したことがあるため、ここでは簡単な紹介にとどめよう。一四五〇年にローマで聖年が祝われた翌年の四月二三日から一〇月三一日まで、メヘレンはネーデルラントの小ローマとなる。当時、ネーデルラントの君主であったブルゴーニュ公の支配下にある信徒のうち、前年にローマに赴くことができなかった者は、この期間中にメヘレンへの巡礼を行うことで全贖宥を得ることができると教皇が布告したのである。しかし、この布告が出されるまでに、メヘレンの都市政府は君主とローマ教皇庁に繰り返し使者を派遣して、粘り強く長期的な交渉に従事していた。相当な労力と資金を費やした上で、ようやく君主、そして教皇の承諾を得られたことが都市会計簿からも明らかである。こうして、聖年の延長を通じて自らの都市を聖地と化すことで、都市政府には、自都市の教会建築資金を確保するのみならず、都市の聖性をアピールすることが可能であり、市民たちによる魂の救いへの要求に応えることもできたのである。聖地の表象という観点では、このときメヘレンの七つの教会が訪れるべき場所として指定された点はきわめて重要であろう。これは、七つの主要な教会を巡るというローマ巡礼のあり方に正確に対応しており、[9] 霊域に焦点を当てることで都市の聖性を賦活し、メヘレンを聖地ローマに準える効果をもたらしたのである。同時に、都市政府の費用でメヘレンの街中

に教皇庁の紋章が描かれ、都市がまさにネーデルラントの小ローマと化した点も見逃せない。[10]

メヘレンの事例は以上だが、その後、ネーデルラントの北部から南東部にかけてを中心に、通常の教皇による聖年の延長とは異なる、きわめて特殊かつ興味深い動きが見られる。一四五一年夏以降、教皇の権限を委任された特使としてネーデルラントに半年近く滞在したニコラウス・クザーヌスは、九月上旬、ユトレヒトに全贖宥を付与する特権を認めたのを皮切りに、翌年二月までの間に、アルンヘムやズトフェン、ルーペルモンデ、トンヘレンやマーストリヒト、シント・トライデンといった諸都市に、メヘレン同様に聖地となる特権を与えている。[11] クザーヌスについては、先ほど、ヴァーチャルな聖年の巡礼を女性たちに勧めたという点で言及したが、彼のそうした勧告は、ネーデルラント都市に次々と全贖宥にまつわる特権を承認した行為と表裏一体である。修道女たちのように閉じられた環境に身を置くことが求められる立場の者には仮想巡礼を、比較的移動が自由ではあるがそれでも聖年にローマにまで赴くことができなかった者には地元都市での巡礼を勧めていると考えられるのである。[12] この点で興味深いのは、次のトンヘレンに関する規定である。

「……前述の地域の住民たちは、トンヘレンの街に赴き、同所で告解と痛悔を経た上で三日の間に先に述べた諸教会を、さらには一二日間で地元の教区教会を敬虔に訪問し、祈り、断食し、献金を支払うならば、上記の者たちのように贖宥を得ることとする。……この贖宥を欲する司祭や助祭、副助祭も前述のこと（教区教会を訪れること?）を行うものとする。加えて司祭は一二回のミサを、助祭と副助祭は四回詩篇を朗誦すべし……。修道士たちは、自らの修道院にいながら主祭壇を訪れ、その修道院の教会の内と外で三〇回の巡回を行い、祈り、断食し、ミサと詩篇を朗誦すべし。[13]」

トンヘレンの市民が二四日の間に同市の諸教会をめぐるべきとの規定の後に記されたこの箇所には、周辺地域の住民たちが三日間この街の教会を訪れ、あとは一二日間自身の属する教区教会で信心行を続ければよいとある。さらに、聖職者

については、若干の曖昧さは残るものの、自身の教会でのミサや詩篇の朗誦によってこれに代えることができ、修道士たちは自身の修道院の主祭壇を三〇回訪れることで全贖宥を得ることができるとされている。われわれは、こうした規定に、仮想巡礼と聖年の贖宥の混合形態を確認することができるのである。

メヘレンの事例では、都市政府が多大な努力の末に小ローマとなる特権を得たわけだが、その他のネーデルラント都市の事例でもそうした都市政府の関与が見られる。アルンヘムの都市役人は、クザーヌスが同市に滞在するよう仕向けるべく君主の宮廷に援助を要請しており[14]、そのアルンヘムに到着するや否や、クザーヌスはズトフェン、デーフェンテル[15]、ズウォレ、カンペンといった都市の使節から訪問を受け、贖宥をめぐる交渉に従事せねばならなかった[16]。また、クザーヌスは、ユトレヒトやアルンヘムで盛大な歓迎を受け、豪華なもてなしを受けたことが都市会計簿からもわかる[17]。都市政府は、こうして大きな労力を払いながら、自己の都市を巡礼の聖地、小ローマへ変容させようと試みたのである。このような点から、以上の一連の動向も、プロセッションとともに、はじめに触れた「市民的信仰」の範疇に含めて議論することが可能かと思われる。しかし、従来の「市民的信仰」に関する議論では、都市政府の関与やそこから必然的に生じる宗教儀礼の公的性格および集団的性格に焦点が当てられがちであり、私的で個人的な信仰との関連は考察外に置かれていたといってよい。これまでの議論から明らかなように、祈りのうちに聖地の表象を喚起し、あるいは喚起された聖地の表象のなかで祈りを捧げることで、贖宥がもたらされるという構造において、これらは連続的に捉えられるべきなのである。一五世紀半ばの聖年後にネーデルラントで起こった諸現象は、この地における私的な信仰のあり方と公的なそれとの関係についてきわめて重要な示唆を与えてくれているといえよう。

① 河原温「中世ローマ巡礼」、歴史学研究会編『巡礼と民衆信仰』、青木書店、一九九九年、九四－一二五頁。

② Appendix VI, in: Rudy, *Virtual Pilgrimages*, p. 401, "Een devote maner om te visiteren die VII kercken. Om te visiteren die seven kercken selmen mercken datmen die mach versoecken in drie rehande andacht. Ten i. als ofmen tegenwoerdich waer te Romen

om te vercrigen die oflaten van dien kercken mit sinen ghebeden, want wie is die hem selven schuldic kent in sonden ende niet en haest om te visiteren die seven kercken? Wie en sel niet uut alre herten begeren ende eyschen die ontfermherticheit Gods, ende en soude dese genade niet soecken? Want men mit disdanige oeffeninge mach verdienen die oflaten als of men waer inder stat van Roemen. Ten .i. A Tot sint Jans telatranen. Daer sijn veel reliqueren, te weten: die hoefden van sint Pieter ende Paulus, die tafel vanden laetsten aventmael ons heren, dat purper cleet ons heren Jhesu.....".

③ Appendix VII, in: Rudy, *Virtual Pilgrimages*, p. 415, "Het was een cluijsenerster die grote begeerte had te Romen te gaen in dat gulden iaer. Ende si verdienden dese gracie dat hoer apenbaerden een engel gads ende seiden dat si blef in hoer cluijs ende leest dit naevolgende gebet, ende also duc als si dat lees, so verdienden si XXX M iaer aflaets. Ende so wie dattet leest II^{c} dagen aen een, die heeft aflaet van alle sunden, ende so voel meer als van elicker reyse XXX^{M} iaer. Doe dit voerden paus quam, gaf hi noch daer toe XXX^{M} iaer alle den genen diet lesen mit vijf Pater Noster ende Ave Marien, ende tot eliker reysen dat sijn te samen LX^{M} iaer aflaets. Ende teijnden den II^{C} dagen aflaet van allen sunden staende inden staet der gracien, die moegen dit aflaet verdienen. Dit gebet leest ierst".

④ W. Cahn, "Margaret of York's Guide to the Pilgrimage Churches of Rome", in: *Margaret of York, Simon Marmion, and The Visions of Tondal*, ed. Th. Kren, Malibu, 1992, pp. 89-98; H. Defoer, "Images as Aids for Earning the Indulgences of Rome", in: *Tributes in Honour of James H. Marrow. Studies in Painting and Manuscript Illumination of the Late Middle Ages and Northern Renaissance*, eds. J. F. Hamberger and A. S. Korteweg, London, pp. 163-171.

⑤ 河原前掲論文、九四-一一三頁; 山辺規子「「聖年」の誕生――「うわさ」の生み出したもの――」、前川和也編『コミュニケーションの社会史』、ミネルヴァ書房、二〇〇一年、一六九-一九五頁

⑥ Johannes Gerson, "Modus quidam, quo certis ex causis Romam ire non valentes in anno Jubileo, spiritualiter peregrinationem eamdem perficere possint", in: *Opera omnia*, vol. 2, ed. L. E. Dupin, Antwerpen, 1706, pp. 523-524.

⑦ Rudy, *Virtual Pilgrimages*, p. 120.

⑧ F. Remy, *Les grandes indulgences pontificales aux Pays-Bas à la fin du Moyen Age, 1300-1531. Essai sur leur histoire et leur importance financière*, Louvain, 1928; J. van Herwaarden, "Medieval Indulgences and Devotional Life in the Netherlands", in: Idem, *Between Saint James and Erasmus. Studies in Late-Medieval Religious Life: Devotion and Pilgrimage in the Netherlands*, Leiden, 2003, pp. 86-122; Idem, *Een profane pilgrimage naar de Middeleeuwen*, Hilversum, 2005 p. 66; J. Kuys, "Secular Authorities and Parish Church Building in Late Medieval Towns in the Netherlands", in: Idem, M. De Smet, J. Kuys and P. Trio, *Processions and Church Fabrics in the Low Countries during the Late Middle Ages. An Inquiry into Secular Influence on Ecclesiastical and Religious Matters on a Local Urban Level*, Leuven, 2006, pp. 109-135; Ch. M. A. Caspers, "Indulgences in the Low Countries, c. 1300-c. 1520", in: *Promissory Notes on the Treasury of Merits*, pp. 65-99.

⑨ 当初のローマ巡礼では、三つないしは四つの教会を巡るのが中心的

だったが、一三五〇年の偽教皇勅書において七つの教会を巡ることが巡礼の条件とされた。これが、メヘレンの聖年における条件設定にも影響を与えたと考えられる。cf. Van Herwaarden, "Medieval Indulgences and Devotional Life in the Netherlands", p. 101; 山辺、前掲論文。

⑩ H. Aotani, "Mechelen's Jubilee Indulgence and 'Pardon' in Burgundian Political Culture", *Proceedings of Medieval Identities: Political, Social and Religious Aspects. The Eighth Japanese-Korean Symposium on Medieval History of Europe, August 21, 2013-August 22, 2013, Tokyo, Japan*, pp. 28-37.

⑪ Remy, *op. cit.*, pp. 67-90.; A. G. Jongkees, "De Jubileum-aflaat van het jaar 1450 in Holland", *Nederlandsch archief voor kerkgeschiedenis* 34(1944), pp. 73-105.

⑫ このネーデルラント巡行の際にクザーヌスが行った説教の内容については、次の文献を参照。D. Thiel, "Die Predichten des Nikolaus von Kues in Flandern und den Niederlanden. Zur Psychökonomie des Ablasses", *Journal de la Renaissance* 6 (2008), pp. 173-99.

⑬ *Codex documentorum sacratissimarum indulgentiarum Neerlandicarum : Verzameling van stukken betr. de pauselijke aflaten in de Nederlanden (1300-1600)*, ed. P. Fredericq, 's-Gravenhage, 1922 [以下では、*Codex* と省略する], p. 134, "Item voluit, quod..... itaque ipsi inhabitatores seu incole dominiorum praedictorum, qui ipsum opidum Tongrense accederint ac ibidem confessi et contriti dictas ecclesias per tres dies et ad hoc ecclesiam eorum parochialem sive matricem in partibus duodecim diebus devote visitaverint, oraverint, jejunaverint, contribuerint, prout alii de quibus supra, dictas indulgentias assequantur..... Item voluit, quod sacerdotes seculares, dyaconi et subdyaconi, qui hujusmodi indulgentias assequi voluerint, etiam praemissa facere teneantur. Et ad hoc sacerdotes duodecim missas, dyaconi et subdyaconi quatuor psalteria legere teneantur..... Item religiose persone in monasteriis suis manendo majus altare visitare, ecclesiam monasterii eorum circuire triginta vicibus intra vel extra, orare, jejunare, missas et psalteria (ut praefertur) legere teneantur".

⑭ K. O. Meisma, "De aflaten van de Sint-Walburgskerk te Zutphen", *Archief voor de geschiedenis van het Aartsbisdom Utrecht*, XXXI (1905), pp. 74-146, とくに pp. 101-102. cf. Remy *op. cit.*, p. 73.

⑮ *Codex*, p. 129.

⑯ Meisma, op. cit., p. 107. cf. Remy *op. cit.*, p. 77.

⑰ *Codex*, p. 130

おわりに

以上のように、一見したところ私的な信仰と公的なそれに区分されるものの間には、聖地の表象と贖宥をめぐって同じ霊性のあり方を確認することができた。そもそも、集団と個人、公と私の現代的な区分で、そうした中世の信仰世界を考察することには慎重であらねばならないということである。[1] とはいえ、連続的に捉えうるからといって、それらがまった

く同じものでなかったことは言うまでもない。たとえば、私的な信仰では、多くの場合、個人や近しい者の魂の救いが問題となったのに対し、公的な信仰においてはしばしば祈りの対象が広く、かつ具体的に拡大される。先に紹介したトンヘレンの贖宥では、四〇回の「主の祈り」を唱えることが規定されていたが、その際、一〇回は死者たちのために、一〇回は教皇と教会全体のために、一〇回はローマ人の王と世俗君主のために、そして一〇回は自らの罪のために祈ることとされていた。[2] 第二章で扱った聖母行列や聖血行列でも、都市を聖地化し周囲の悪しきものから区分することが儀礼のハイライトをなしている。さらに、贖宥と結びつくわけではないものの、プロセッションと都市、祈りの関係を明瞭に表現する事例を一つ付け加えておくならば、一四七九年五月一七日にブルッヘで行われた臨時のプロセッションでは、聖血をかかげた市民が贖罪を強く意識したスタイルで都市を練り歩き、地域の平和と君主の戦争勝利を祈願している。[3] こうした都市やその周辺への神的加護を祈願するプロセッションは、一五世紀後半に数多く確認される。[4] 都市や教会をはじめとする社会集団は、個人の救済への願いを、その社会集団の命運と一体化させ、祈願させることで、住民たちの集団への帰属心を強めようと試みたのである。こうした点には、やはり私的な信仰との微妙な相違を見ることが可能である。しかし、より具体的で詳細な相違についての検討は、今後の課題となる。[5]

今後の課題という点では、儀礼の身体性も重要である。やはりモースに触発される形で、またT・アサドによる儀礼と服従的主体の形成の問題に刺激を受ける形で、[6] レインバーグは、祈禱行為という儀礼の意味が精神や魂のレベルのみならず、身体のレベルにおいても創出されることを強調している。[7] この祈りの身体性について、本稿では視覚を通じての表象の喚起や、歩く行為への言及を通じて若干触れることができたに過ぎない。しかし、仮想巡礼の指南書には、その他にも、聖遺物や受難のオブジェの香りによる嗅覚の刺激、[8] 断食の実践や聖家族の食事へのヴァーチャルな参加など、祈りや黙想と身体の関係を考察するにあたってひじょうに興味深い記述が見られる。この点を検討することで、近代的な身体観とは異なる中世的な身体と精神のあり方を明らかにすることができるかもしれない。また、久松英二はヨーガにも通ずる一四

世紀ビザンツの神秘主義的な祈りの身体所作や呼吸法を明らかにしているが、[9] そうした他地域の事例との比較の道も開けてくるだろう。事実、仮想巡礼は、イスラーム圏にも確認されるという。[10] そうした比較的考察についての可能性を指摘して、本稿を終えることとしたい。

① Williamson, *op. cit.*, pp. 1–2.

② 第三章注⑬を参照。

③ *Het boeck van al 't gene datter geschiedt is binnen Brugghe*, ed. C. L. Carton, Gent, 1859, p. 12.

④ Brown, *op. cit.*, pp. 73–99.

⑤ レインバーグは、都市パリ全体が一教区のミサにおける祈禱の対象となっている事例を紹介しているが、こうした事例をどう理解するかも今後の課題であろう。cf. Reinburg, *op. cit.*, pp. 188–189.

⑥ タラル・アサド（中村圭志訳）『宗教の系譜――キリスト教徒イスラムにおける権力の根拠と訓練――』、岩波書店、二〇〇四年。

⑦ Reinburg, *op. cit.*, pp. 162–171. この点については、次の文献も参照。J＝C・シュミット（松村剛訳）『中世の身ぶり』、みすず書房、一九九六年、二九五－三二八頁。

⑧ 中世後期における感覚の問題については、第一章注㉓の諸文献を参照。

⑨ 久松英二『祈りの心身技法――十四世紀ビザンツのアトス静寂主義――』、京都大学学術出版会、二〇〇九年。

⑩ Beebe, *op. cit.*, p. 206.

〔付記〕 本稿は科学研究費補助金基盤研究Cによる研究成果の一部である。

（明治大学文学部准教授）

development. It will surely be necessary to reexamine the process of the development of Senju nenbutsu congregations by focusing our sight on various social causes and the expansion and contraction in the number of members of these clerical groups.

Representations of Sacred Sites and Indulgences in the Late Medieval Low Countries

by

AOTANI Hideki

In late medieval Europe, people tried to accumulate in various ways as many indulgences as possible in order to shorten the period during which they would have to stay in Purgatory to purify their souls. Pilgrimage to Jerusalem as well as to Rome was the prevailing practice to obtain these indulgences. However, without traveling to these remote places, people were able to gain the same spiritual benefit that the pilgrimage guaranteed by other means: virtual pilgrimage, through which an individual practiced imagined travel to the Holy Land in an enclosed space such as a private room or monastery, and collective rites, as represented by processions, that would transform a city into the sacred place by imposing a representation of Jerusalem or Rome on the urban space. Those rituals enabled the devotees to evoke the representation of these holy cities and to walk through and pray at the imagined sites. Then, they would experience sacred time and space in the 'Heilsgeschichte,' centered on the Passion of Christ, and obtain the benefit of the indulgences from their Savior.

In the late medieval Low Countries that are the focus of this paper, meditative or reflective religious movements such as Devotio Moderna (the Modern Devotion) flourished, and at the same time prominent cities experienced the most advanced social development in contemporary Europe. Therefore, people were able to practice both privately as in virtual pilgrimage and collectively in urban rituals in public spaces such as procession in order to obtain the indulgences associated with them. Nevertheless, previous studies have not paid sufficient attention to the relationship between, on the one hand, the private, individual rituals and the

public ones, on the other hand. This paper tries to clarify that both had the same structure and could stimulate the devotee's imagination about these holy lands in order to utilize them to experience sacred space and time and to pray for their salvation. First, I discuss how virtual pilgrimage and urban processions used the representation of Jerusalem and how they fulfilled the desire for salvation. Then, virtual pilgrimage to Rome is compared with the transformation of cities into the 'little Romes' prompted by papal indulgences. Analysis of those religious practices reveals how on many occasions they undoubtedly provided those who were enthusiastic for the accumulation of the indulgences the means of salvation of their souls.

Temples and Local Society in Ba County, Chongqing Prefecture during the Late Qing Period: A Fundamental Study Centered on Ba County Archives

by

MIZUKOSHI Tomo

There have been a variety of studies related to urban and rural social structures on the spatial aspect of "prayer" in early-modern China. However, given the paucity of source materials on worship on the popular level and the critical view of intellectuals, it is difficult to know the reality of the situation. This article collects the voices from the popular level and attempts to explore the possibility of using these valuable "live" sources, which have not been subjected to the filtering of intellectuals, as archival data. In this endeavor, I have employed the Ba County Archives 巴県档案 that contains government documents of Ba county in Chongqing prefecture from the late Qing period and which contains many historical records of temples in the area that have not been previously employed.

The content of the Ba County Archives can be divided into orders from government agencies regarding temples and source documents for legal suits, and from these sources the following can be learned regarding the temples: first what was the ordinary attitude of local officials towards the temples or how local people were related to the temples, in other words, the function of the temple as social space; and second, the actual conditions of